

ちよつと聞いてくれ。

中年オヤジの切実な悩みを聞いてくれ。

俺には高校生になったばかりの娘がいるんだが、その娘が、入学早々に新しく友達を作った。もちろん親として、それは喜ばしいことだ。我が家が学校の近くにあるからか、最近の放課後はいつもその友達を家に連れてきて楽しそうにしている。

それが困るのだ。

なぜならその友達が……あまりにもエロいから。

「おじさま、こんにちわはあ」

「あ、ああ、ラミイちゃん……いい、いらっしやい」

「はい。お邪魔します」

彼女がちよつとお辞儀をするだけで、制服に包まれた爆乳がぶるぶると揺れやがる。本当ならガン見したいところだが、娘の前でそんな真似はできない……だから俺はいつも気力を振り絞って視線を引き剥がす。

ドスケベボディだけならまだ我慢できたかもしれない。

ラミイちゃんはそのうえ、絶世の美少女だ。何やらしいとこのお嬢様らしくて、その佇まいには親しみやすさと同時に気品を感じられる。その可憐な笑顔に俺はいつもたじたじた。

もしアイドルになれば絶対に人気出るだろうな……

「あれえ？」

台所の方から間抜けな声が聞こえた。

「ねえパパ、ジュースはあ？」

「え……ああ、ごめんよ。さっき全部飲んでしまつて」

「ええ、全部う？ ああいう砂糖マシマシの炭酸ジュースは若者向けなんだからさあ、パパが飲んだらまうた太っちゃうよ？ ただでさえおデブちゃんなんだから！」

からかうように、お腹をべしべし叩かれた。

この子が俺の娘の、ねねだ。

ラミイちゃんが高校生とは思えないほど大人びているのに対し、ねねはねねで高校生とは思えないほど子供っぽい。まあ、そこが可愛い子ではあるんだが……対照的な性格の二人がどうやって仲良くなったのか、少し気になるところだ。

「ガールズトークはお菓子とジュースがないと盛り上がらないんだよ？ だからパパ、何か買ってきてよ」

「ちよつとねね、あんたはまたそうやってお父さんにワガママ言うんだから……おじさま、気にしないでいいですからね。ほら、行くよ」

「ぶ」

ラミイちゃんがねねの手を引っ張り、階段を上がっていく。

何度も遊びに来ているだけあつて、ラミイちゃんも勝手知ったるという様子だ。

「……」

俺はその場にしゃがみこみ、階段を上る二人を見上げた。

ラミィちゃんのスカートの下に、むっちりむちのデカケツとシックなデザインのレースパンティを見つけて、ニヤニヤと鼻の下を伸ばす。
やっぱりエロい、エロすぎるよラミィちゃん……ねねなんて高校生にもな
って縞パンなんて穿いてるというのに。
もう我慢の限界だったのだ。
今日という今日は、この荒れ狂う高ぶりをラミィちゃんに受け止めてもら
うと決めていた。このエロさはもはや犯罪級だ。誰かが断罪してやらねばな
らんのだ。



俺は台所に向かった。

俺以外は利用しない、酒の類を仕舞っている棚の奥から、この日のために用意した特製ドリンクを取り出す。俺がわざわざ冷蔵庫からジュースを枯らしておいたのは、このためだ。今日、二人にはこいつを飲んでもらう必要があったからなあ……

俺はしばらく時間を置いてから、機を見てねねの部屋に向かった。ノックをしてから、

「ねね。ラミイちゃん。差し入れだよ」

「わ。買ってきてくれたの？ さっすがパパあ、わかってるう」

ねねは上機嫌に、俺からお盆を受け取った。

お盆の上にはお菓子と……特製ドリンク入りのグラスが、ふたつ。ラミイちゃんは少し申し訳なさそうに、

「すみません、おじさま。わざわざありがとうございます」

「いや、いいさこのくらいのこと……じゃ、ごゆっくり」

俺は部屋を出ると、廊下の死角に待機して息を潜めた。

五分くらい待っただろうか。部屋の中の話し声が段々と静かになっていき、やがて物音ひとつなくなったことを確信すると、俺はほくそ笑んだ。ゆっくりとドアノブを回し、室内の様子を確かめる。

ねねもラミイちゃんも、床に転がるようにしてぐっすり眠っていた。

俺は二人の肩を揺すって反応を確かめる……起きる気配はない。

「ぐふ……噂通り、よく効くドリンクだ。高い金を払った甲斐がある」

俺は早速、ラミイちゃんの身体に覆い被さって唇を貪った。

「はむう……ちゅぶ、ちゅるるっ……れろおおお」

「んあ……んっ♡ ちゅ♡ んちゅ……れろ、ちゅ♡」

「はあ、はあ……っ！ 女子高生の唇、ぷるっぷるで柔らかっ……唾液もうっめ……じゅるるるる。ラミイちゃん、もうファーストキスは済ませたのかな？ まだだったらごめんよ、こんなおっさんが初めてで」

一方的に舌を絡めつけながら、俺はラミイちゃんの制服を脱がせた。

ほんの数年前までランドセルを背負っていたとは思えない爆乳が「どたぶんっ♡」と姿を現し、その威容を前に、俺は最高級の芸術品を目の当たりにしたような気分になった。

考えるより早く手が動き、それを揉みしだく。

「うおおおおおっ……なんだ、このデカパイは！ ラミイちゃん、こんなものぶら下げてるのほんと人前に出ちゃあいけないよ……おじさんが取り締まらせもらうからね！」

「んはっ♡ んんんっ♡」

「マジで、なんちゅーサイズだ。100センチとか余裕で超えてんだろ。それに加えて、デカ乳輪にぷっくり乳首……けしからん、けしからんぞおラミイちゃん」

「あっ……ふん♡ んう、あっ♡」

「乳首いじられて感じてやがる。敏感なんだねえ、ふふ」

もうちんぽが勃起しすぎて痛いくらいだった。

俺は邪魔なズボンを脱ぎ捨て、ラミィちゃんに馬乗りになった。両手の五指でデカ乳をしっかりと捕まえながら、汗で蒸れた魅惑の谷間に亀頭を近づけていく。

へへへ……

この爆弾おっぱいでちんぽこ扱きてえってずっと思ってたんだよなあ……

ぬふっ——ふふふふふふふふ——

「ああっ飲み込まれていく……ッ」

とんでもない乳圧とサイズ感だ。

俺のモノは決して小さいわけじゃないが、ラミィちゃんのおっぱいの前ではかたなした。大人ちんぽを、まるで子供のそれみたいに容易く包み込んでしまう。その感動的な快感にしばらく打ち震えてから、俺は腰を振った。



「やっぱ、若い娘の肌はハリツヤがえぐいなあ……すべっすべのおっぱいが、竿全体に張り付いてきて……」

「んあ……あ、あ、あ……っ♡」

「ラミイちゃん、乳まんこ犯されて感じてるのかい？ えっただねえ……ま、おじさんひと目見たときからわかってたけど。この子は絶対に天性の淫乱だって信じてたよ」

「はあっ……あ♡ あ♡ あん♡」

「くうううう、寝顔えっろおお……ぶっかけていい、ラミイちゃん？ いいよね？ 出すよ！ 娘の友達の可愛いお顔に！ くっさいくっさいおじさんザーメン発射するよ！」

「はふ♡ あっ……んぷ♡ くううん……♡」

ラミイちゃんの谷間から飛び出した精液が、彼女の寝顔に降り注ぐ。口の中や髪の毛、巨大なふたつの乳房もあっという間に白濁汁でどろどろだ。綺麗なものを汚していくこの快感……病みつきになりそうだ。

俺は射精の脈動が収まるまで、ラミイの中でムスコをじっとさせていた。

そのあいだに、背後へと手を伸ばしてラミイちゃんのお股をチェックする。

指先に、くちゅりという感触。

見なくてもわかる。濡れていた。

「ふひひ……いけない子だなあ、ラミイちゃんは。肉欲全開のオスを前にして、こんなにおまんこを濡らすなんて……これはもう『どうぞわたしをオナホにしてください♡』って言っているのと同義だよ？」

俺はラミイちゃんのおっぱいからちんぽを引き抜き、次なるターゲットに目を光らせる。足を掴んで、左右にオープン……女の子ってのはどこを触っても柔らかい。この太腿もじっくり味わいたいところだが、それより優先すべき穴が目前にある。

この瞬間を目に焼き付けるように、ゆっくりとラミイちゃんのパンティを脱がす。

うひよ、糸引いてらあ。

一気にメスのフェロモンが立ち込めて……うーん、堪らん。

俺は肉棒をラミイちゃんの膣穴に押しつけ、そのまま躊躇なく挿入した。

「んほおおおおオオオ……ッ♡」

「ぐっ！ きつつう……おいおいマジかよ、JKのナマまんこってこんなにすげえのか……おじさん、学生時代は女に縁がなくてさあ。若い女の身体ってのを知らないんだ。だから、ラミイちゃんであっさり味わわせてもらおうね！」

「おほオ♡ お、おっ♡ おんっおんっおんっ♡」

「ああっ気持ちいい！ ぎもぢいいいっ！ 最高だよおラミイちゃん！」

俺はまるで初体験を迎えた童貞みたいに腰を振った。

人の親とは到底思えない、知能ゼロのサル顔で腰を振った。

相手は眠ってるんだから、見栄を張る必要もない。童心に帰ったつもりで楽しませてもらおう……俺は、何十歳も年下の女の子に縋りついて自分が気持ちよくなることだけを考えた。

ふと横を見ると、ねねが無邪気な顔で眠っている。
娘の隣で、娘の友達を犯す……
その背徳感がぞくぞくと背筋を這い回った。

「ねね……ありがとうなあ。お前がラミイちゃんを連れてきてくれたおかげでパパ、今とっても気持ちいい思いができてるぞお。ほうら、見えるか？ スケべまんこがちんぽにきゅんきゅん吸いついてきて、種汁をせがんでくるんだ」

「んひっ♥ おお……ほおツ♥ おっ。おン♥」

「喘ぎ声きったね……ラミイちゃんは清楚な女の子だと思ってたけど、おじさんの勘違いだったね。睡姦レイプされてんのに、こんなバカみたいに感じてさあ……思った通り、生粋の肉便器だよラミイちゃんは」

「んはああああ……あ。あっあん♥ あひっ♥ ひんっひんっ♥」

「ああ、マジでこの声、ちんぽを挑発しやがる……どうやって喘げば男が興奮するか、本能で理解してるんだね？ おかげで……めちゃくちや濃いのが……出そうだよ、ラミイちゃん！ ラミイちゃん！ ラミイまんこに出すよ！ おじさんの精子で妊娠するんだ、いいね！」

「オほ、おおお……おおおオオおおお……ッ♥♥♥」



びくびくと痙攣するラミイちゃんのおまんこに、俺は全力で射精を行った。

その瞬間にラミイちゃんの身体が大きく跳ね、大の男を押しつけるような力強さでがつくんがつくんと腰を震わせている。膣圧でちんぽを食いちぎられそうだった。結合部だけを見ればどっちがレイプしているのかわからないくらいだ。

「ぐほっ……まだ出る、止まらんっ……む、娘と同年の女子高生に、中出し射精……ッ！」

「ほおおおおお……ッ♥」

「ああ、ラミイちゃんのむちむちボディに抱きつきながら、おまんこにザーメン吐き出すのすんげー幸せ……母性を感じるよお。ラミイちゃんは、きっといいママになるだろうね」

「ひぐっ♥ おっ♥ イつく♥」

射精後の余韻もじつくりと楽しんだ後に、俺はちんぽを引き抜いた。大の字になったラミイちゃんは股ぐらから精液をひり出しつつ、まだ痙攣を続けていた。ハート型のアホ毛が面白いくらいに振動している。

「さあて、もう一発——」

「ん、むにや……パ、パ……？」

心臓が口から飛び出すところだった。

振り返ると、ねねがにわかにも目を覚ましていた。

おいおいおい……ラミイちゃんは今もぐっすりなのに、どうしてねねの方が起きるんだ。た、体質の問題で、クスリの効きが悪かったのか？ とにかく、こんなところを見られたらおしまいだ。

俺はねねに寄り添うと、その頭を優しく撫でた。

「ね、ねね……いい子だから、おやすみ。もう一度、ほら……」

「んん、へへえ……頭なでなで、気持ちいい……パパあ……」

寝ぼけているのか、ねねが抱きついてきた。

その胸元がちょうど、俺の股間を覆い隠すようにのしかかってきた。

断っておくと、俺は今もまだフルチンだ。服を着る暇なんてなかったからな……興奮冷めやらず、未だに勃起状態のペニスが実の娘のデカパイに触れている。その事実、俺の獣性を更なる高みへと無理やり押し上げた。

「ね、ねね……」

我知らず、俺は娘のおっぱいを揉んでいた。

ラミイちゃんは大人顔負けのドスケベボディだが、実のところねねも負けていない。子供っぽいと言ったのは中身のことで、その身体はラミイちゃんに負けず劣らずの豊満ぶりなのだ。

白状するが、俺はねねで抜いたことがある。

だって……このデカパイだぞ？

そりゃあ抜くだろう。

なんなら抜かない方が失礼まである。

だが、いくらオナネタにしようと、実際に手を出そうと思ったことはない。

その理由はもちろん、血を分けた娘だからだ。

しかしラミィちゃんの睡姦レイプを果たした今、俺の頭はすっかり性欲に支配されており、ピンク色の悪魔が囁くのだ——そこにもう一匹、犯し甲斐のありそうなメスがいるじゃないか、と。

一人やるのも二人やるのも同じだった。

俺は、ねねの唇にぶちゅうつと吸いついた。

「んちゅ♡ ちゅ……れろ……♡」

ねねに目立った抵抗はない……というより、反応がない。目蓋が開いているが脳が覚醒しておらず、自分が何をされているのかわかっていないのだろう。てんで無抵抗で俺のされるがままになっていた。

「ぐふふ……ねねとちゅーするのは、お前が小学生のとき以来だなあ」

「はむう……ちゅぶ♡」

「あの頃はあんなに細っこかったのに、まさかこんなスケベ女に育つとはなあ」

「あ、あ……♡」

俺はねねのスカートを捲って、綿パンの中に指先を忍ばせた。

なんと、もうぬるぬるじゃないか……まさか、ラミィちゃんの喘ぎ声を聞いて、えっちな夢でも見てたのかな？ こりゃあいいや。潤滑油としては十分だ。

パパの指が一本、二本……

あーあ、簡単に根本まで入ってしまった。

で、ぐちゅぐちゅぐちゅと……

今からここにパパのぶつといのが入るんだから、よくほぐしておかないとな？



俺は右手に力を込め、がしがしと手マンを施した。
するとねねはあっという間に、

「ンほっ♡ おお おおおオオオオオ……ッ♡♡」

尻が宙に浮くほどの勢いで腰が跳ね、盛大にイキ潮をぶち撒けた。

ねねはぼうっとしたまま、よくわからないけど気持ちいい、というような顔で虚空を見詰めている。頭の上に何個かクエスチョンマークが浮かんでいるように見えた。

俺は娘の愛液がべつとりと付着した指先を舐め、ニヤリと笑う。

「いつの間にか、こんなド派手に潮を噴くようになっていたなんて……すっかり『女』じゃないか。これはもう、ねねを子供扱いできないなあ」

俺はねねの上体をベッドに押し倒し、娘のデカケツにべちべちと肉棒を打ちつける。

ねねは依然として一切の抵抗なく、無防備に股ぐらをおっ広げている。今から突っ込むのは赤の他人ではない。

ずっと小さい頃から見守ってきた娘の、娘の……娘のおまんこなのだ。それを自覚すればするほどに興奮はいや増し、近親相姦の禁忌に触れる背徳感に俺は筆舌に尽くし難い幸福を覚えていた。

ねねのぐちょ濡れまんこに、俺の亀頭がキスをする。
そしてそのまま一気に、娘の秘部を我がものとした。

「ンおお お♡ おっ♡ おおッ♡」

「うぐっ！ こ、これがねねのおまんこかあ……ラミィちゃんのねっとりと絡みつくような感じとはまた違う、ぎゅぎゅの狭穴だねえ。ふふふ、身体の方はすっかり大人になったと思っただけ、ここだけは子供のままだね」

「ンほっ♡ おお♡ おっほ♡ ほオオオ♡」

俺は無意識のうちにピストンを繰り返して、娘まんこを貪っていた。絶え間なく腰を打ちつけ、その度にねねのデカ尻がいやらしく波打った。
俺に犯されながら、ねねはゆっくりと振り向いた。

「パ……パ、パパあ……♡ なに、してるのお……♡」

「んー？ どうしたんだい、ねね？ パパは何もしてないよ？」

「でも、なんか……気持ちいい♡ パパ、えっちなことしてるう……♡」

「してないしてない。パパがねねにそんなことするわけじゃないか？」

「ん……そっか♡ そうだね……♡」

「そうそう、物わかりがよくて偉いね……そうやって、大人しくオナホになってるんだよ。羊さんを数えているあいだに終わるからさ」

「あっ♡ ひっ♡ ひイン♡」

ねねのケツが淫らに動き始めた。父親のちんぽを欲する求愛行動だ。意識的なものではなく、身体が勝手に動いているのだろう。ねねは相変わらずぼうっとした表情のまま、下半身だけが生殖本能を発揮していた。

俺は無言で抽搐を繰り返した。

「ンはあああああああ あ あ あッ……………♥」

俺はねねのケツ肉を押し潰すみたいに密着しながら、子宮口にゼロ距離で射精を行った。ねねの小さなおまんこはすぐにザーメンが溺れてしまったが、俺は構うことなく精液を吐き出し続けた。

「くううう！ パパちゃんぽで娘に中出しするの気持ちよすぎイイ……………っ！」

さつきラミイちゃんに出した量も大概だったが、今度はそれ以上だった……………

ずっと心の奥底に抱いていた感情が溢れ返っていくように、俺のちんぽは濃厚な妊娠エキスを止めどなくねねの中に送り込んでいく……………まだ高校生になったばかりの、十五歳の娘を、孕ませてしまった。

あ……………

ついにヤっちゃまったなあ……………

でも、元はといえばねねがラミイちゃんのようなエロ女を家に連れてきたのが原因……………いや、そもそもねねがこんなドスケベボディしてるのが悪い！ そうだ、そうに決まってる！

だから、ねね……………？

責任持って、パパのための孕み袋になるんだぞお……………

「はああ……………めっちゃ出たわ」

長い射精を終えてから、恐る恐る陰茎を引き抜くと……………びゅぽっ！

こりやまたとんでもない量のザーメンが勢いよく飛び出してきた。

「ふう、気持ちよかったあ、最っ高だあ……………お前ら二人とも、まんこの出来がよすぎるぞ。さては前世はサキュバスか」

俺は両手を伸ばし、ねねのケツとラミイちゃんのおっぱいを、それぞれうように揉みしだいた。

つと、こうしてはおられん……………

二人が目覚めます前に後片付けをしないと。

「……………」

いや……………せっかくだし……………

もう一発ずつくらい、やっておくおか？

それから俺はリビングで何事もなかったかのようにしていた。
窓から差し込む西日が強まってきた頃、二階から足音が下りてきた。

「ふあゝあ……いつの間にか寝ちゃったね」
「そだね。もしかしたら寝不足だったのかな？」

最近、テスト勉強で夜遅かつ

たし」
「あゝわかるわかるう。ねねもそうだわ」
「嘘おっしやい。あんたが夜遅くまでテスト勉強なんてするわけないでしょ？」

二人の他愛のない会話に耳をそばだて、俺は胸を撫で下ろす。
どうやら身体の異変に気づいた様子はなさそうだ。ねねもラミイちゃんも、いつも通りの日常を送っているつもりでいる……寝ているあいだに中出しレイプされていたなんて、それこそ夢にも思いうまい。

今も二人の子宮では、俺の精子が元気に泳いでいるはずだ。
そう考えるだけで、俺は股間が膨れ上がっていくのを我慢できなかった。

「おじさま、お邪魔しました」

「あ、ああ……またいつでもおいで、ラミイちゃん」

差し入れを用意して待ってるからね。
ああ、なんて待ち遠しいんだろう。













